

保育者志望女子学生の幼少期の遊び体験

—神戸海星女子学院大学での記録から—

心理こども学科 國家 順子

はじめに

本学心理こども学科の学生と出会うことになって、早くも4年間の過ぎようとしている。

前任校における20数年に及ぶ授業では、「保育原理」をはじめとする理屈っぽい講義しか経験してこなかった筆者が、配当年次1年生の選択科目、「こども文化論」を担当することになった。さあ大変である。正直のところ不安いっぱいであったが、気持ちを切り替えて、学生と共に楽しめる時間になればいいかと考えることにした。そのために、一方的な講義ではなく双方向性の授業になるようにと心がけ、折に触れて、授業中にミニレポートやアンケートを実施してきた。定期テストでは、レポートおよび製作物の提出も求めることにした。

その一環として、毎年度の受講生に「私が小さかったころの遊び」と題するアンケートへの回答を求めてきた。その結果、2004～2006年の春学期、秋学期、計6期分の回答を得ることができたので、それを整理し、考察しておきたい。

1. 目的

本来、幼稚園は、1840年ドイツのフレーベル（1782-1852）によって創設された時から「何よりもまず幼児を遊ばせながら導くこと、すなわち遊戯で

指導すること、また楽しませながら幼児の力を発展させる¹⁾」ことを幼児教育の根本としており、明治9年（1876）にわが国で幼稚園が誕生してからも、この考え方が、多少の紆余曲折を経ながらも継承されてきたことは周知の通りである。

そして、近年、幼稚園における保育内容を示す「幼稚園教育要領」が平成元年（1989）に大きく変わり、その後平成10年に改訂されてからも、幼稚園教育の基本として遊びを通しての総合的な指導²⁾が3本柱の1つとして大切に考えられなければならないとされているのである。

この方針に基づいて、幼児教育・保育の実践の場で、真に遊びの楽しさを幼い子らに伝え、味あわせることができるためには、保育者自身がその楽しさを身をもって味わい、経験していることが求められるに違いない。そうでなければ、子どもの遊びを見る目や、その遊びがどのように発展していくのかを見通す力が十分に備わっているとはいえないだろうからである。

「幼児教育は化育である。それには何よりもまず教育者自身が幼児のよき環境となり、さらに幼児の諸能力を目覚まし、強化する教育的な環境³⁾」にならなければならないからである。

実際、「これを楽しむんだったらこんな遊びがいいとか、これを経験させたいときには素材としてはこれよりこっちの素材がいい」とかの判断は「教師自身の体験や遊びに関する理解力⁴⁾」によると考えられているのに、最近の教師の中にこの理解力が減少してきているのではないかと危惧されるようになってきている。

こうした意味から、本学心理こども学科生の幼少期の遊び体験を認識しておくことは、彼女たちの保育者としての資質の一端を知る上で役に立つのではないかと考える。

2. 方法

「こども文化論」の授業開始第1日目の授業終了前の時間を使って当日の出席者を対象に、2004～2006年度の春学期、秋学期、計6期にわたってアンケートを実施した。第1回目の授業ということで当日の出席状況は大変よかった。

* テーマ：「私が小さかったころの遊び」で、自由記述、複数回答も可

2004年度春学期生には、初めての試みであったこともあり、漠然とした問い方で、「誰と」「どこで」「どんな遊び」をしたかという3項目のみであった。同年の秋学期生からは、「小さかった頃」を幼児期と小学校低学年期とに分け、「何人位で」遊んだかも問う8項目に改めた。配布した形式は表—1の通りである。

表—1 私が小さかったころの遊び

	誰と	()人位で	どこで	どんな遊び
幼児期				
小学校低学年				

* 調査対象：

2004（春学期）	：44名	（秋学期）	：36名	
2005（春学期）	：60名	（秋学期）	：36名	
2006（春学期）	：14名	（秋学期）	：34名	計：224名

3. 結果と考察

上述の手続きを経て得られた結果を整理したものが表—2から表—5である。順次、表—2からみていくことにする。

表-2 誰と遊んだか (遊び相手)

時期 対 相手	'04 (春)		'04 (秋)		'05 (春)		'05 (秋)		'06 (春)		'06 (秋)	
	44名		36名		60名		16名		14名		34名	
			幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小
家 族 以 外	友 達	46.0	55.6	92.2	65.0	95.0	68.8	87.5	71.4	100.0	82.4	100.0
	近所の子	25.0	41.7	22.2	33.3	18.4	31.2	18.8	28.6	14.3	26.5	12.0
	親戚の子				3.4		6.3	6.3			5.8	2.9
	友達の家族		1.0	2.8								
	近所の大人				3.4							
	母の友人の子				1.7							
	幼・保の先生				1.7						2.9	
	知り合い				3.4	1.7						
	姉の友達					1.7						
計	71.0	98.3	117.2	111.9	116.8	106.3	112.6	100.0	114.3	117.6	114.9	
家 族	きょうだい	20.0	22.2			10.0	6.3	6.3	21.4	7.1	14.7	8.8
	家 族	3.0	2.7			1.7		6.3	7.1			
	親 (母)	1.0	5.5	1.0			12.5	6.3			5.8	
	計	24.0	30.4	1.0	0.0	11.7	18.8	18.9	28.5	7.1	20.5	8.8
そ の 他	犬	3.0										
	猫	1.0										
	1 人 で		2.7									
	計	4.0	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(単位 %)

表-3 何人位で遊んだか

時 期		'04(秋)	'05(春)	'05(秋)	'06(春)	'06(秋)
何人で 対 象		36名	60	16	14	34
幼 児 期	1 人	2.8	3.3	—	—	—
	2～3人	44.4	41.7	62.5	42.9	23.5
	4人まで	11.1	11.7	6.2	7.1	26.4
	4～5人	16.7	20.0	12.5	7.1	2.9
	5～10人	22.3	23.4	25.0	50.0	32.4
	10人以上	11.1	6.7	—	—	5.8
	いろいろ	—	—	—	—	5.8
	たくさん	—	—	—	14.3	—
	わからない	2.8	—	—	—	2.9
	計	111.2	106.8	106.2	121.4	99.7
小 学 校 低 学 年	1 人	2.8	1.7	6.3	—	—
	2～3人	16.7	23.3	31.2	7.1	20.6
	4人まで	16.7	—	31.2	14.3	11.8
	4～5人	13.9	36.7	12.5	35.7	11.8
	5～10人	44.4	28.5	12.5	14.3	26.4
	10人以上	5.6	20.1	6.3	7.1	14.7
	いろいろ	2.8	—	—	—	8.7
	たくさん	—	—	—	21.4	5.8
	わからない	2.8	1.7	—	7.1	—
	計	105.7	112.0	100.0	107.0	99.8

(単位 %))

表-4 どこで遊んだか (場所)

場 所		'04(春)	'04(秋)		'05(春)		'05(秋)		'06(春)		'06(秋)		
		44人	36人		60人		16人		14人		34人		
			幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	
屋	人工的 空間	公 園	72.7	33.3	41.7	46.7	43.3	50.0	50.0	28.6	42.9	50.0	50.0
		園 (校) 庭	11.4	5.6	50.0	5.0	46.7		31.2		57.0		55.9
		砂 場	9.1			10.0				7.1			
		マンションの広場						6.3					
		神 社 (寺)	6.8										
		街					1.7						
		駐 (車) 輪 場	4.5										
		児 童 館	2.3										
		プ ー ル				1.7							
		計	106.8	38.9	91.7	63.4	91.7	56.3	81.2	35.7	100.0	50.0	105.9
外	自然空間	川	20.5										
		畑・田んぼ	18.2	5.6	2.8								
		山 (森)	11.4	2.8								2.9	
		広場・空き地	6.8	2.8	11.1					7.1	7.1	2.9	
		海	4.5										
		秘密基地					1.7		6.2				
		計	61.4	11.2	13.9	-	1.7	-	6.2	7.1	7.1	2.9	2.9
その他	その他	家の前の道	11.4	22.2	2.8		11.7	12.5	6.2			17.6	32.3
		近 所			2.8	21.7					21.4		
		通 学 路	4.5										
		外		2.8	8.3	5.0	11.7	6.3	6.2	7.1	7.1	2.9	5.9
		どこでも								7.1			
		階 段		2.8									
		色々連れて行ってもらう				1.7							
計	15.9	27.8	13.9	28.4	23.4	18.8	12.4	14.2	28.5	20.5	38.2		
合 計		184.1	77.9	119.5	91.8	116.8	75.1	99.8	57.0	135.6	73.4	147.0	
屋 内	内	自 分 の 家	13.6	36.1	30.6	40.0	30.0	12.5	31.2	57.1	21.4	32.3	26.4
		友 達 の 家		2.8	2.8	13.4	11.7	18.8	25.0				8.8
		幼稚園・保育所		36.1		25.0		37.5		42.8		38.2	
		教 育 室							6.2				
		体 育 館										2.9	
		学 童 保 育 所					3.4						
		喫 茶 店					1.7						
合 計		13.6	75.0	33.4	78.4	46.8	68.8	62.4	99.9	21.4	73.4	35.2	
総 計		197.7	152.9	152.9	170.2	163.6	143.9	162.2	156.9	157.0	146.8	182.2	

(単位 %)

表-5 小さかったころの遊び(種類)

種類		対象		'04(春)	'04(秋)	'05(春)	'05(秋)	'06(春)	'06(秋)							
		44人		36人		60人		16人		14人		34人				
		幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小			
健 康	道 具 使 用	ブランコ		18.2		13.9	10.0	10.0		18.7		21.4	8.8	11.8		
		自転車		13.6		5.6		5.0						8.8	2.9	
		ドッジボール(ボール)		13.6	2.8	11.1	1.7	13.3	6.2	18.7			7.1		14.7	
		一輪車		11.4	2.8	13.9		6.7		6.2			14.2		26.5	
		縄跳び		11.4		13.9	10.0	13.3	6.2				21.4	2.9	26.5	
		公園の遊具で		9.0	13.9	8.3	5.0	6.7	6.2			7.1	14.2		8.7	
		ゴムとび		9.0		5.6		1.7								
		フラフープ		6.8		2.8		1.7								
		バドミントン		4.5		2.8										
		卓球		2.3												5.8
		竹馬		2.3								7.1		2.9		
		アスレチック		2.3												
		鉄棒		2.3		2.8	5.0						7.1		5.8	
		サッカー		2.3				1.7						2.9		
		バスケット		2.3				1.7								
		ローラースケート		2.3		2.8	1.7	3.3						2.9	8.7	
		凧揚げ		2.3												
		吊り輪				5.6		3.3					7.1		2.9	
		タイヤ跳び				2.8										
	滑り台				2.8	5.0	5.0	6.2	6.2			14.2	2.9			
ジャングルジム					3.3	3.3	6.2						2.9			
計		115.9	19.5	94.7	41.7	75.0	31.0	49.8	14.2	99.6	32.1	117.2				
道 具 な し	走り回る			6.8												
	泳ぎ			4.5												
	山登り			2.3												
	散歩					1.7										
	けんぱ			4.5												
	体操													2.9		
計		18.1	—	—	1.7	—	—	—	—	—	—	—	2.9			
環 境	草花摘み			20.5	2.8	2.8					7.1					
	虫取り			13.6								7.1	2.9			
	魚とり(釣り)			11.4												
	探検			11.4	2.8		3.3						2.9	2.9		
	雪遊び			6.8	2.8											
	ザリガニ取り			4.5												
	泥(砂)遊び			6.8	30.6	2.8	30.0	5.0	31.2		35.6	7.1	44.1	2.9		
ホタル観賞			2.3													

(単位 %)

表-5 小さかったころの遊び(種類)

種類	対象	'04(春)	'04(秋)		'05(春)		'05(秋)		'06(春)		'06(秋)	
		44人	36人		60人		16人		14人		34人	
			幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小
環境	蟻じごく	2.3										
	柿取り	2.3										
	水遊び		8.4						7.1		2.9	
	どんぐり拾い		2.8									
	木登り				3.3	6.7		6.2		7.1	5.8	11.8
	公園めぐり					1.7						
	ぶらぶら					1.7						
	トンネル作り				1.7							
	落とし穴作り				1.7							
	計	81.9	50.2	5.6	40.0	15.1	31.2	6.2	49.8	21.3	58.6	17.6
人間関係	鬼ごっこ	59.1	27.8	44.4	18.3	48.3	12.5	56.3		78.6		85.3
	ままごと	29.5	61.1		46.7	10.0	43.7	12.5	64.3	7.1	67.6	11.8
	かくれんぼ	25.0	5.6	8.3	11.7	18.3	6.2	12.5		21.4	8.8	29.4
	靴飛ばし	13.6										2.9
	秘密基地づくり	9.1	2.8								2.9	5.8
	リレー	4.5										
	(幼稚園)学校ごっこ	4.5			1.7							
	花いちもんめ	4.5		2.8	1.7						2.9	5.8
	だるまさんが転んだ	2.3	2.8	5.6	1.7							5.8
	ピアノ教室ごっこ	2.3										
	カード交換	2.3										
	宝探し	2.3										
	ボタン	2.3										
	ジャンケン(グリコ)		2.8									2.9
	トランプ		2.8			1.7				7.1		
	警泥			19.4	1.7	10.0		6.2		14.2		23.5
	キックベース			2.8								
	かごめ(鍋底抜け)			2.8	3.3				7.1			
	～ごっこ			8.3	10.0	11.7	31.0	6.2	7.1		20.4	5.8
	駆けっこ				3.3	8.3						
	ハンカチ落とし				1.7							
	イス取りゲーム				1.7							
	オセロ(双六)				1.7			6.2				
	(TV)ゲーム					8.3		18.7				2.9
	長なわ					3.3						
缶けり					1.7							
親たちの邪魔					1.7							
計	161.3	105.7	94.4	105.2	123.3	93.4	118.6	78.5	128.4	102.6	181.9	

(単位 %)

表-5 小さかったころの遊び(種類)

種類	対象	'04(春)	'04(秋)		'05(春)		'05(秋)		'06(春)		'06(秋)	
		44人	36人		60人		16人		14人		34人	
			幼	小	幼	小	幼	小	幼	小	幼	小
言葉	絵本		2.8								2.9	2.9
	おしゃべり			2.8			6.2				2.9	
	ビデオ鑑賞				1.7							2.9
	かるた				1.7							
	読書					1.7						
	なぞなぞ							6.2				
	計	—	2.8	2.8	3.4	1.7	—	12.4	—	—	5.8	5.8
表現	シルバニアファミリー(人形)	6.8	13.9	11.1	23.3	11.7	6.2	25.0	7.1	7.1	11.8	11.8
	落書き	4.5	2.8									
	編み物	2.3										
	ドミノ倒し	2.3										
	積み木(ブロック)		5.6		5.0	1.7			7.1			
	折り紙		5.6	2.8	5.0		6.2					
	(ピアノ)オルガン弾き			2.8	1.7		6.2					
	お絵かき				11.7	6.7				7.1		
	ぬりえ				5.0	1.7						
	粘土				1.7	1.7			7.1		2.9	
	踊り				1.7		6.2					
	お菓子作り					1.7		6.2				
	しゃぼん玉											
	その他(おもちゃ)										8.7	
	計	15.9	27.9	16.7	55.1	25.2	24.8	31.2	28.4	14.2	23.4	11.8

(単位 %)

(1) 誰と遊んだか(遊び相手)

調査対象となった学生は1985年以降に生まれた者たちである。「子ども白書 2006⁵⁾」によって1950-2005年の日本の合計特殊出生率の推移を見ると、1966年ヒノエウマの年の1.5代のそれを除いて、1973年以降2.0を割るようになり、以降、少子化の傾向が続いている。そして、1986年度厚生省(当時)調査では、当該年度のきょうだい数は平均1.7人ということである。

そうした社会的背景を考慮に入れて表-2をみてみよう。

遊び相手を家族と家族以外とで比べると、幼児期から親やきょうだいとの

遊びよりも、家族以外の人との遊びが圧倒的に多いことがわかる。どの年度においても、園その他で出会った友だちが遊び相手になっているということである。

NHK放送世論調査所が昭和54, 55年(1979, 1980)の2回にわたって「幼児の生活とテレビ⁶⁾」に関する調査を首都圏、大阪、秋田で生後4ヶ月から小学校入学前の6歳までの幼児について実施した結果でも、既に2・3歳から親、きょうだいとの遊びが急激に減っていることが報告されていることは興味深いものがある。

就学前の子どもたちが遊び仲間に出会うためには、今日では集団保育に参加することが不可欠になっているようである。

また、小学校低学年期になると、おけいこごとや塾に費やす時間が増えてくるとも手伝って、放課後、近所の子やきょうだいとの遊びがさらに減る傾向にあることがわかる。

(2) 何人位で遊んだか(仲間の数)

2004年春学期生にはまだこの設問をしていなかったことは先に述べた通りである。同年秋学期以降、自由記述の形でさまざまな回答が寄せられたが、それらを適当にグループ分けして集計したものが表—3である。

サンプル数が均等でないため、十分信頼できる比較にはならないが、幼児期では2~3人という回答が多い中で、2006年度では5~10人の方が多くなっている。これは、子ども同士の自然に生まれた仲間というよりも園の保育の場で意図的につくられたグループの形を想起した結果かと考える。

というのは、「幼児心理学⁷⁾」によると「4才頃には3人位で一緒に遊べるようになる。5才代になるとさらに相手の数は増える。そして、成人がうまく指導しさえすれば、10人以上でもルールを守る遊びやゲームが楽しめるようになる。」とされているからである。

小学校低学年期については、2004年秋学期では5～10人、2005年春学期では4～10人のところに集まっており、秋学期では2～4人と、その他の年度とは少し異なった形を示している。2006年春学期では4～10人、たくさんだという回答が多く、秋学期では2～3人の小グループと5～10人のグループとに分かれている。

他の項目に比べると、この項目への複数回答は少なかった。

(3) どこで遊んだか (遊び場)

表—4のように、まず遊んだ場所を屋外と屋内に分け、屋外を人工的空間と自然空間とその他に分けてみた。屋外と屋内の割合を見ると、2006年春、秋学期の幼児期の外は屋外の方が多く、小学校低学年期になるとその割合はさらに増えている。とりわけ、幼児期の遊び場では、人工的空間である公園が首位を占めている。

土地をめぐる社会の変化に伴って、子どもの遊び場がおとなたちが意図的に用意した公園へと集約されていったためであろう。「かつてのように、広っぱ、原っぱは期待できないから、その機能を公園という形で町のあちこちにつくらねば⁸⁾」ならなくなったのである。小学校低学年期になると、これに校庭が加わっている。

屋外でも、自然空間における遊び場は年度が進むにつれて、遊び場の種類も、回答数も一層減少していく傾向にあるようである。

屋外の「その他」の遊び場としては、家人からも子どもからも、お互いに呼べば応えられる距離にある「家の前の道」と「近所」を挙げた者が多い。このような遊び場は、民俗学者の柳田国男によって「軒遊び」として乳幼児期から小学校期の中に設定されているという。

「幼稚園児ぐらいになると、家のなかでおもちゃと遊ぶだけでは少々もの足りない。そうかといって、おもてへ飛び出してひとりで遊ぶのもちょっと

不安だ。保護者がいないと完全にひとりでは遊べない。そこで、内でもないし外でもないという軒端で遊ぶ。柳田国男はそれを『軒遊び』と名づけた。『内遊び』と『外遊び』の中間⁹⁾を意味する遊び場だといっている。子どもの心の育ちに寄り添った、なんと微妙で含蓄のある遊びの分類の仕方かと思う。

他方、「屋内」では、「自分の家」と「友だちの家」が大部分を占めている。この状況は、神奈川県内の小学2, 4, 6年生を対象とする「子どもの遊びに関する調査結果報告書¹⁰⁾」において、放課後や休日によく遊ぶ場所として「自分の家」と「友だちの家」という回答が2年生：46.5%、4年生：50%、6年生：51.1%と学年が進むにつれて高い数値を表していることと考え合わせると興味深いことである。

その一方で、幼児期の遊び場として「幼稚園」を挙げている者も多い。今を去る十数年前、今回アンケートの対象となった学生たちがまだ幼児であった頃には、今日ほど幼い子どもたちが事件や犯罪に巻き込まれることも少なかったであろうが、これからの幼稚園や保育所は子どもたちにとって安全で安心な遊び場として、ますますその重要性が高まっていくのではなかろうか。同様のことが廣瀬聡弥¹¹⁾によってもいわれている。

(4) どんな遊びをしたか (遊びの種類)

遊びの分類の仕方については、多くの研究者によるものが知られている。

たとえば、ピアジェは、子どもの知的な発達に即して機能的遊びから象徴的遊びへ、パーテンは、社会的発達という見地から、とりとめのない行動から協同遊びまでを6段階に分けている。また、わが国の研究者、山下俊郎による感覚遊び、運動遊び、模倣ないし想像遊び、受容遊び、構成遊びという分け方もよく知られているところである。

本報告では、試みに、現行の「幼稚園教育要領」の保育内容の考え方に用い

られている「領域」の観点から考えてみたい。ここに用意されている「領域」は5つであり、次のように編成されている。

- * 心身の健康に関する領域 「健康」
- * 人とのかかわりに関する領域 「人間関係」
- * 身近な環境とのかかわりに関する領域 「環境」
- * 言葉の獲得に関する領域 「言葉」
- * 感性と表現に関する領域 「表現」

これら5つの領域に即して遊びの種類を整理した結果が表—5である。

文部科学省が念を押しているように、領域は「相互に関連をもち」「総合的に指導されるもの¹²⁾」であるため、これは「健康」にのみかかわる遊び、これは「人間関係」などと明確に区分し得るものではないが、試みに整理してみたものである。

まず、表—5の「健康」からみることにする。

道具を使つての身体運動遊びの種類としては、2004年春学期が17種類ともっともバラエティーに富んでいる。幼児期と小学校低学年に分けて問うた2004年秋学期以降でみると、2005年秋学期以外では、幼児期よりも小学校期に種類が増えている。個別の遊具名を挙げずに「公園の遊具で」とした回答の中には、当然、ブランコ、滑り台が含まれているであろうことを考えると、幼児期に好まれる屋外遊具の上位にブランコが挙げられるとあってよいだろう。

ブランコは、既に16世紀中期（1560）に製作されたというブリュゲルの「子供の遊戯」に描かれている91種類の絵の中にも見ることのできるもので、滑り台、砂場と合わせて「公園遊具の三種の神器と言われ、公園にはなくてはならないものである¹³⁾」

幼児期にはほとんど遊ばれず、小学校低学年になると好まれる遊びに一輪車、ローラースケート、吊り輪などがみられるのは、流行や技術的な巧緻性

が求められる遊びであったり、身長伸びや運動機能の発達が求められるためであろうか。この領域にかかわる遊びでは、道具を使っての遊びの方が圧倒的に多いことが分かる。この種の遊びを道具を使わずに楽しむためには、何とんでも仲間の存在が必要になってこよう。

次に、「環境」にかかわる遊びについてみよう。

筆者は、本学学生の通学区域を詳細に知り得る立場にはないが、西は三木、加古川、明石方面から東は箕面、川西方面からも通学している学生がいることを考えると、その幼少期を山、川、海、田園地帯と比較的自然に恵まれた環境で過した者も多いのではないだろうか。そして、まだ行動範囲が限られている幼少期の遊びは、子どもが育てられているその地域と密接に結びついているといえるだろう。

この領域においても、2004年春学期の遊びの種類が最も多い。これは一つには、幼児期と小学校低学年を分けて問わなかったために、両期を合わせて想起、回答したせいであるのかもしれない。

年を追う毎に遊びの種類が減っている中で、「泥（砂）遊び」は子どもに好まれる遊びであり続けていること、特に、幼児期に好まれる遊びであることがはっきりしている。2005年春学期生の幼児期のトンネル作り、落とし穴作りもここに含めてもよかったかもしれない。

公園や園庭には砂場がつきものであるが、仙田満によると、その始まりは、「そもそも今から100年ほど前の1885年、アメリカのマサチューセッツ州バーメンター街の礼拝堂の敷地内に砂場をつくったところ、礼拝に出席した多くの子どもたちがあそび、それが一般に児童公園の始まりとなった」という。さらに彼は、「砂場はどんな遊具よりも優れて」おり、「子どもたちの自由な発想を呼び覚まし、一人でも集団でも¹⁴⁾」遊べ、創造力を刺激する遊び場だといっている。

環境にかかわる遊びは、小学校低学年よりも早い時期の幼児期にこそ大

いに楽しまれる遊びであることが表から読み取れる。フレーベルの云うとおり、遊びは、子どもによる「環境の観察、外界の自主的受容、自主的な生命表現、したがって自主的な没頭¹⁵⁾」の姿だからである。

続いて「人間関係」にかかわる遊びをみると、「鬼ごっこ」「ままごと」「かくれんぼ」が上位3位を占めている。「警泥」もかくれんぼと同種の遊びであることを考えると、前述の3種類の遊びが、仲間遊びの代表であるといつてよいだろう。先のブリューゲルの絵にも、目隠し鬼ごっこが描かれている。「この遊びはすでに古代ギリシャ時代から¹⁶⁾」知られている人気のある遊びの一つとされている。

幼児期よりも小学校低学年に「鬼ごっこ」「かくれんぼ」を挙げている割合が高い。仙田満が名古屋市内の小学生に鬼ごっこの面白さについて自身の研究室で尋ねたところ、「捕まえたり、逃げたり、助けたりするのがおもしろい。走り回ってスッキリとする。好きな時に好きな友だちとできる。スリルが好き¹⁷⁾」などの答えが代表的なものであったというから、この種の遊びは、体力がついてきて、運動量が増し、仲間関係が広がる学童期に適した遊びであることが理解できる。

これに反して「ままごと」は、幼児期に大いに楽しまれ、学童期にはこれを卒業して、その他の遊びへと変わっていくらしいことが分かる。

ちょっとした小道具を要するこの種の遊びもあるが、多くは、仲間が揃いさえすれば、アイデアを出し合って手軽に始められることが、この領域の遊びの強みであろう。そんな中で、回答数は多くないものの、わらべうた遊びの「花いちもんめ」「だるまさんが転んだ」「かごめ」「なべなべ底抜け」などが楽しまれているのは嬉しいことである。将来、保育の場で、この種の遊びが次世代の子どもたちに伝えられていくだろうと期待できるからである。

続いて、「言葉」にかかわる遊びについてみる。

直接「言葉」にかかわる遊びとして、表面的、形式的に考えると種類も回答

数も非常に僅かなものとしてしか拾えない。しかし、先に考察してきたさまざまな遊びを、子どもたちが無言で展開するとは考えられない。十分コミュニケーションをとり、言葉を交わしながらでしか遊びを楽しみ、継続し発展することができないからである。特に、「人間関係」にかかわる遊びにおいては、大いに言葉が行き交い、きまりごとが生まれ、新しい言葉を身につけていったに相違ない。しかし、言葉はあまりにも自然に、意識されることなく発せられるので、とりたててカウントされなかったのであろう。

そう考えた上でなお、子ども期というのは、全身を使っての遊びを通して、種々の直接体験を積み、五感を研ぎ澄ませて、身近な人、物、自然の環境に触れ、この世界からの印象を身体に刻み込んでいくにふさわしい時間であり、大人の介在がある場合は別として、文字や映像を通じて間接的な経験を重ねていくには、いま少しの時間を必要としているのだといえるだろう。

最後に、「表現」にかかわる遊びについてみておこう。

第一段目のシルバニアファミリー¹⁸⁾というのは、1985年3月20日にエポック社から発売されたドール・ハウスである。ままごとのように、子ども自身が家族構成員の1人としてその役割を演じて楽しむというのではなく、ドール・ハウスを舞台に、4~7人(?)の動物たちを主人公として役割にふさわしく行動させて楽しむもので、子ども自身は、ちょうど芝居の演出家のような立場で想像力を働かせて楽しむのである。

人形遊びはすべての年度の幼児期、小学校低学年において楽しまれていることが分かる。「人形遊びはどんな時代でも女の子のもっとも自然でかつ好きな」遊びで、「すでにギリシャの浮彫に、人形と人形箱を手にする少女の描写がみられる¹⁹⁾」という。

この領域にみられるその他の遊びはかなり分散したものとなっている。このことから、「表現」にかかわる遊びには、個々の子どもの個性や得意が反映されやすいのではないかと考える。大きな共通性はみられないものの、「お

絵描き」「ぬり絵」「粘土」「落書き」をひとつの範疇にまとめると、「表現」遊びの中では、絵画的表現に属する遊びの占める割合が高いといえる。

仙田満は、小さな子どもは「描いてみたいから描く」のであって、描かれたものは美しくはないが、たくましく元気な絵であるといい、「創造力」と「描写力」が大切であるとして、「描写力は後から学ぶことができるが、自由な創造力は学べるもの」ではなく、この「創造力は子どもたちの自由な遊びを通してはぐくまれる²⁰⁾」といている。

4. 結論

以上みてきたことから次のことがいえる。

- (1) 少子化を背景とするきょうだい数の減少によって、幼児期から、親、きょうだいなど家族との遊びよりも家族以外の人との遊びが多い。
- (2) 遊び仲間の人数については、発達心理学的にみて、幼児期には3人位が自然な形とされているが、集団保育を経験する者が増えてくると、5～10人位での遊びが強く印象に残る可能性もある。
- (3) 近年巷間でいわれていることに反して、本学心理こども学科の学生の幼少期の遊び場としては屋外が多いが、その具体的な場としては、自然空間よりも人工的空間である公園が多い。また、屋外と屋内の中間に位置する「軒下」を遊び場としてきた者もかなりいることは、昔に変わらぬ子どもにとっての本質的な安心の遊び場所を教えてくれている。
- (4) 遊びの種類については、単に表面的に数の上からだけ判断することは差し控えなければならないが、5領域という観点で整理した結果からは、「人間関係」にかかわるものが最も多く、次いで「健康」にかかわるものが多い。また、この領域での遊びでは道具が使用されることが多い。

まさしく、フレーベルが唱導したように、子どもの内に備わっている活動衝動を外面に表すには、遊具が必要であることがわかる。

5. おわりに

たまたま、不思議なご縁で本学心理こども学科、延べ224名の女子学生の皆さんの、幼少期（約10数年以前）の遊び体験のアンケートへの回答を得る機会を与えられたことに心から感謝いたします。

そして、本学を卒業されて後、保育の道を志す方々が幼い子らと共に遊びを楽しみ、いきいきと活躍していかれますことをお祈りします。

注

- 1) 莊司雅子「改訂 幼児教育学」柳原書店 S.39 p.124
- 2) 文部省 「幼稚園教育指導書増補版」平成元年 p.26～28
- 3) 1) のp.45
- 4) 森上史朗、高杉自子、柴崎正行編 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 2004 p.249
- 5) 日本子どもを守る会〔編〕「子ども白書 2006」草土文化 2006 p.63
- 6) NHK放送世論調査所編「幼児の生活とテレビ」－0歳から6歳まで－ 日本放送出版協会 S. 56 p. 44-45
- 7) 黒田実郎「幼児心理学」柳原書店 1987 p.121
- 8) 仙田満「子どもとあそび」岩波新書 1993 p. 4
- 9) 吉本隆明「家族のゆくえ」光文社 2006 p.57～58
- 10) 5) のp.86 2003年10月、全国アウトドア・マリンスポーツフェアinかながわ実行委員会と神奈川県教育委員会による
- 11) 幼稚園の屋内と屋外における様々な遊び場所が仲間との関わりに及ぼす影響「保育学研究」第45巻 第1号 2007 日本保育学会 p.55
- 12) 4) のp.81
- 13) 8) のp.31
- 14) 8) のp.9～10
- 15) フレーベル著 岩崎次男訳「幼児教育論」明治図書 1979 p.54
- 16) 森洋子「ブリューゲルの『子供の遊戯』・・・遊びの図像学」未来社 1989 p.113
- 17) 8) のp.26
- 18) 出典：フリー百科事典『ウィキペディア』2007 7.5
- 19) 16) のp.73
- 20) 8) のp.43-44

参考文献

- | | |
|-------------|--|
| O. F. ボルノウ著 | 岡本英明訳「フレーベルの教育学」理想社 1973 |
| フレーベル著 | 岩崎次男訳 世界教育学選集9『人間の教育 1』明治図書 1980 |
| フレーベル著 | 岩崎次男訳 世界教育学選集10『人間の教育 2』明治図書1980 |
| 片山忠次編著 | 「幼児の保育指導」法律文化社 1988 |
| 文部省 | 「幼稚園教育指導書 増補版」H.1 |
| 文部省 | 厚生労働省児童家庭局 改訂版「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」チャイルド本社 2000 |